

西トップ遺跡北祠堂レンガ遺構全景

西トップ遺跡では、昨年度から北祠堂の解体修復をおこなっている。基壇まで解体を進めたところ、中央部からこのレンガ遺構を検出した。金製品などの遺物が出土するとともに、内面が焼けて炭化物も多いことから、火を使用した何らかの祭祀行為が北祠堂建立前におこなわれたと推定される。

写真上：北から、下：東北から

本文8頁参照（撮影：杉山 洋）



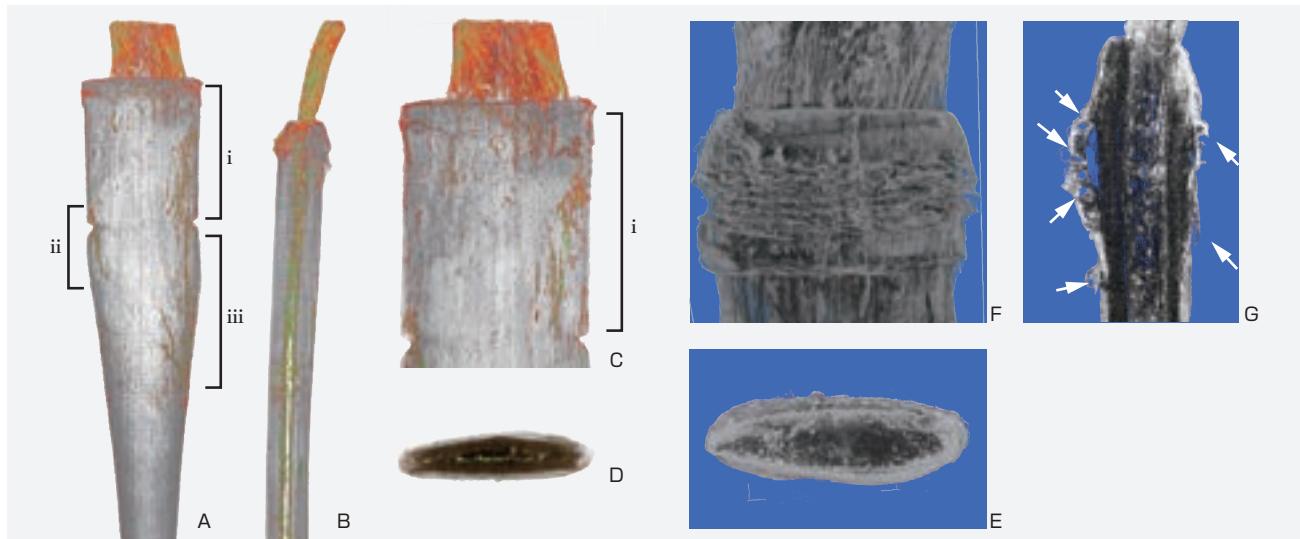
佐志武神社本殿

出雲市内神社調査の一つ。切妻造・妻入で正面に階隠をもつ、いわゆる大社造の本殿。正面の幣殿と接続して縁と階隠を囲う一般的な形式（本文D2形式）だが、出組の組物をもち、装飾的細部が多いのが特徴。明治前期。西から。

本文28頁参照（撮影：杉本和樹）



図版 2



平城宮・京跡出土漆刷毛の
三次元立体画像

漆刷毛のX線CT画像を立体画像化し、漆刷毛内部の構造を調査した。

A～D：刷毛7・6033、E～G：刷毛8・6036

画像A～C：刷毛7の板柄を透過表示し、CT値が毛と近似する部位について橙～緑で表示。iは、纖維残滓、iiは漆などの残滓と推定され、今後の検討が待たれる。

画像D：刷毛7の柄先端部横断面。

毛を橙～緑、板柄を褐色で示す。

画像E：刷毛8の柄先端部横断面。

画像F：刷毛8先端の縛縄部分の表面を透過して表示。

画像G：刷毛8の縛縄部分の縦断面。

矢印は紐が消失し中空になった部分。

本文42頁参照



国宝薬師寺東塔初重支輪裏板

彩色画が描かれ、側面に樹皮が残る部材で、年輪年代測定によって729年（左）および730年（右）という伐採年代が特定された。『扶桑略記』などの記述と整合する東塔の建立年代を示すと考えられる。

本文75頁参照（撮影：中村一郎）



藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第189次）

調査地は大極殿院南門の南、朝堂院朝庭北端部にあたる。今回の調査と第153次・179次調査の成果により、7基の大型柱穴、その南に16基からなる柱穴列、東西に東西柱穴列という大極殿院南門前面における儀式遺構の全容が判明した。とりわけ、中央に1基、その東西に各3基が三角形状に並ぶ7基の大型柱穴は、大宝元年（701）の元日朝賀の際に立てられた7本の幢幡に関わる遺構と考えられる。南から。

本文84頁参照（撮影：栗山雅夫）



大宝元年元日朝賀の様子の復元

大宝元年の元日朝賀では、大極殿院南門の南に、中央に鳥形幡、その東西に日・月、東北に青龍幡、南東に朱雀幡、西南に白虎幡、北西に玄武幡が立てられた。復元した幢幡を各柱穴付近に配置した。赤い柱が大極殿院南門の遺構表示、その奥の森が大極殿。南から。（撮影：栗山雅夫）

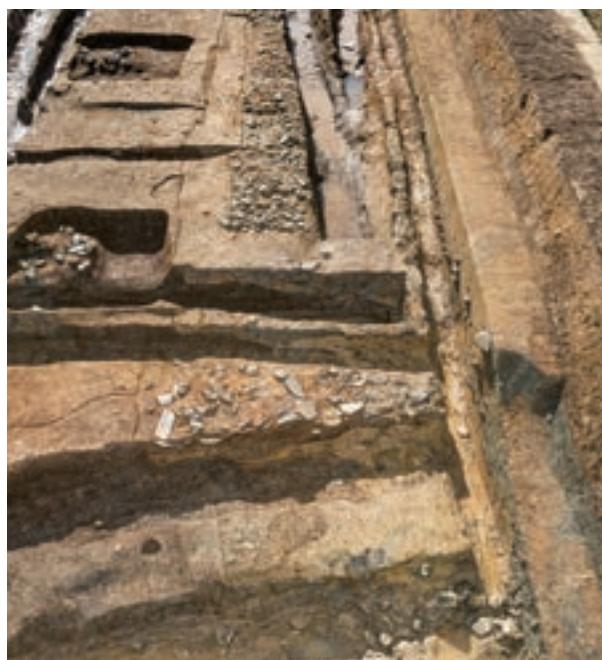
図版 4



藤原京大極殿院の調査（飛鳥藤原第190次）

調査地は大極殿院東門と東面南回廊にあたる。東門の南端となる3基の礎石据付穴を確認した。また、東面南回廊の礎石据付穴と根石、基壇外装据付溝と抜取溝、雨落溝を検出した。本文103頁参照（撮影：栗山雅夫）

本文103頁参照（撮影：栗山雅夫）



東面南回廊の内庭側の遺構検出状況

東面南回廊の内庭側では、基壇外装据付溝・抜取溝と礫敷が良好な状態で検出できた。北から。 (撮影:栗山雅夫)



東門と東面南回廊との取付部

取付部の棟通りで、礫を詰めた礎石据付穴を検出した。取付部の柱間寸法（栃行）は回廊の柱間寸法とは異なる。北から。（撮影：栗原雅夫）



藤原京右京九条二坊・三坊、瀬田遺跡の調査
(飛鳥藤原第187次)

調査地は本薬師寺の南方約200mにあたる。ボリテクセンター奈良の本館建て替えにともなう発掘調査で、写真手前が右京九条二坊西北坪、写真奥が右京九条三坊東北坪である。後者は西二坊大路の西側にあたり、掘立柱建物7棟や南北塀4条などを検出した。北東から。 本文138頁参照 (撮影: 栗山雅夫)



円形周溝墓SX4500

調査区中央部で検出した弥生時代後期末の円形周溝墓。直径約19mの墳丘に、撥形にひらく陸橋が南側に付属する (右写真)。陸橋部を含めた全長は約25.5mで、周溝からは庄内0式の弥生土器が多数出土した (下写真)。東から。 (撮影: 栗山雅夫)



図版 6



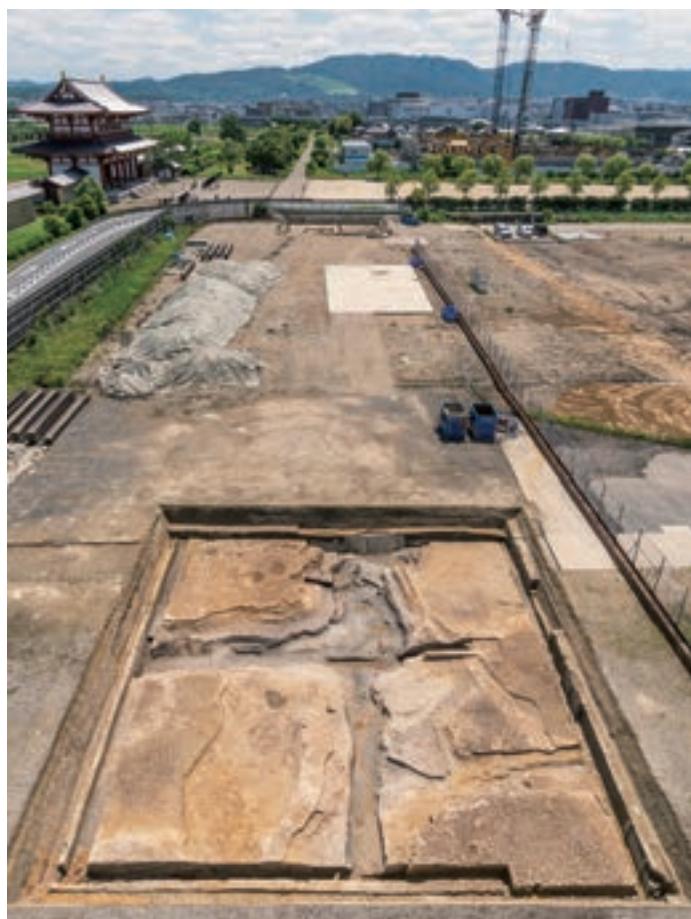
平城京右京三条一坊一・二坪、

朱雀大路の調査

(平城第552次)

南区全景。調査地は朱雀大路およびその西側の平城京右京三条一坊一・二坪にあたる。朱雀大路西側溝のほか、三条条間北小路の南北両側溝を確認した。南西から。

本文190頁参照（撮影：中村一郎）



平城京朱雀大路・二条大路の調査（平城第566次）

西区全景。二条大路南側溝、二条大路を横断する南北溝SD3400、西一坊坊間東小路西側溝を検出した。奥の東区では、朱雀大路西側溝と二条大路南側溝の合流点を検出した。西から。

本文190頁参照（撮影：中村一郎）

朱雀大路西側溝東岸しがらみ護岸SX3410

東区で検出した朱雀大路西側溝では東岸にしがらみ護岸が検出された。0.4m間隔で杭を斜めに打ちこみ、その間に長さ2mほどの細い枝を5段ほど交互に積み上げて籠状に編み、岸側を裏込め土で埋めている。西から。

（撮影：飯田ゆりあ）





平城京右京三条一坊二坪、朱雀大路の調査（平城第577次）

調査地は朱雀大路およびその西側の平城京右京三条一坊二坪にあたる。本調査では、杭列とともに朱雀大路西側溝およびその西側に隣接する築地塀の基礎が検出された。南西から。本文190頁参照（撮影：中村一郎）



平城京二条大路東一坊域の調査（平城第576次）

東一坊域の二条大路北側溝を検出した。本調査地は、宮内から流れてくる中央大溝と二条大路北側溝との合流部付近と考えられ、北側溝が大きく膨らむ様子が伺える。南東から。

本文270頁参照（撮影：栗山雅夫）



平城京朱雀大路・二条大路の調査（平城第578次）

朱雀大路西側溝が二条大路を横断することを確認し、朱雀大路西側溝の東岸に3か所の張出を検出した。類例がなくどのような機能をもっていたかは断定できないが、橋と何らかの関係がある遺構の可能性も考えられる。南から。本文190頁参照（撮影：飯田ゆりあ）

図版 8



東大寺東塔院跡の調査（平城第574次）

東塔基壇の東北部や南面西寄りの部分などを調査した。塔基壇の南・北の縁辺部では、鎌倉時代再建塔の基壇盛土の中に奈良時代創建塔の基壇外装が良好な状態で遺存していることを確認した。南西から。

本文262頁参照（撮影：杉本和樹・飯田ゆりあ）



平城京左京二条二坊十一坪の調査

（平城第563次）

調査地は東院庭園の南東に位置する。既往の調査では奈良時代の大型掘立柱建物2棟（SB6950・6990）の東妻を検出していた。本調査区ではそれらの西方に続く同一の東西棟掘立柱建物を2棟確認した。南から。

本文232頁参照（撮影：杉本和樹・鎌倉 綾）



興福寺南大門西門守屋の調査（平城第567次）

南大門の南西で、西門守屋の基壇外装やその抜取溝などを検出した。西門守屋が東門守屋とほぼ対称の平面形態であることが判明し、建物の廃絶時期についても見通しが得られた。右奥は南大門の復元基壇。南西から。

本文252頁参照（撮影：杉本和樹・飯田ゆりあ）